

価値と価値形成機構

——ポパーの内部的淘汰の理論に関連して——

笠原俊彦

1. はじめに
2. 狭義の価値としての選好の概念的性質
3. 価値形成機構としての選好—選好構造
 - 3-1 遺伝子的選好構造と行動的選好構造
 - 3-2 対象観念形成機構と価値形成機構
4. 価値形成機構と内部的淘汰
 - 4-1 個体における行動的選好構造の変化
 - 4-2 行動的選好構造の伝播
 - 4-3 価値形成機構と内部的淘汰
5. おわりに

1. はじめに

わたくしは、かつて、ポパー (Karl R. Popper) の内部的淘汰の機構 (der innere Auslese Mechanismus) の理論ないし内部的淘汰 (die innere Selektion) の理論¹⁾を考察し、そこにおいて中心的位置を与えられている選好 (Präferenzen) が、わたくしの狭義の価値に類似していることを明らかにした²⁾

ポパーのいう選好は、第一に、いわばプラスの心的状態としての望ましきのみならず、マイナスの心的状態としての望ましくなさをも含むものであり、この点で、望ましきの観念のみならず望ましくなさの観念をも含む狭義の価値に類似している。それは、第二に、有機体によって意識されていることを必要とせず、それが意識されている場合にも、この意識されているものは全体の一部

でしかない点で、狭義の価値に類似している。それは、第三に、何らかの対象に固有の属性ではなく、この対象に対峙する主体としての有機体に属し、この主体によって対象観念に、そして対象に付与されるものであり、また、それが結び付く対象観念と対象とを変化させうるだけでなく、それ自体もまた変化する点で、狭義の価値に類似しているのである。

だが、その後、ポパーのいう選好、そしてわたくしのいう狭義の価値について考察を重ねるにつれて、わたくしは、ポパーのいう選好を以上のように理解するだけでは十分ではないとの感を強くすることになった。わたくしは、とりわけ、かれのいう選好について、狭義の価値としての選好の他に、これとは異なるもう一つの選好を理解する必要に迫られることになったのである。ここに狭義の価値としての選好とは異なるもう一つの選好とは、狭義の価値としての選好を形成する機構ないし価値形成機構としての選好に他ならない。

ポパーにおいては、狭義の価値とこれを形成する機構としての価値形成機構とは、その相違が意識されることなしに、選好という一つの言葉で表されているように見える。しかし、この二つは、明確に区別されるべきものである。この二つを区別し、それぞれの性質を考察することによってのみ、ポパーの内部的淘汰の理論、そして、わたくしが解明しようとしている価値の問題は、より明確化されることになるであろう。

わたくしは、この論文において、ポパーのいう選好について、狭義の価値と価値形成機構とを区別し、両者の関係を明らかにするとともに、このことがポパーの内部的淘汰の理論にとってもつ意味、そして、それが価値の問題にとってもつ意味、を考察したい。予め述べておけば、ポパーのいう選好は、狭義の価値としてよりも、むしろ、価値形成機構として理解される場合に、はじめて、かれのいう内部的淘汰の主要因となる。そして、内部的淘汰において選好が優位性をもつというかれの主張を認めるとき、価値形成機構こそは、有機体の進化を、したがってまた、われわれがとりわけ関心をもつ人間の進化を、規定する主要因である、といわざるをえないのである。わたくしは、以下の論述を、

狭義の価値としての選考を再考することから始めることとしよう。

2. 狭義の価値としての選好の概念的性質

すでに述べたように、ポパーにおいては、選好という言葉は、一つには、わたくしのいう狭義の価値と同じ意味で用いられている。かれが何らかの有機体による何らかのものごとの選好について述べる時、そこには、その有機体によるそのものごとへの狭義の価値の付与が意味されているのであり、ここでは、選好という言葉は、暗黙のうちに、わたくしのいう狭義の価値を意味するものとして用いられているのである。この場合、有機体によって選好されるものごと、すなわち狭義の価値が付与されるものごとが、厳密には何らかの対象そのものではなく、この対象について当の有機体が形成する心像としての対象観念であることは、いうまでもない³⁾

さて、狭義の価値としての選好については、わたくしは、まず、これが、特定の個体としての有機体によって、特定の時間および空間において形成されることに注意しておきたい。それは、特定の個体としての有機体が、特定の時間および空間において、何らかの対象について対象観念を形成し、この対象観念に対して、その都度、形成し付与する、何らかの特定の好ましきまたは好ましくなさの観念である。それは、対象観念と同じく、特定の個体としての有機体によって形成されるのみならず、特定の時間および空間において一回毎に形成され消滅するのであり、この意味で個別性ないし一回性という特質をもつ。

ポパーの内部的淘汰の理論は、このような狭義の価値としての選好が存在していることによって成立することができる。だが、この選好は、まさに、以上のように一回性という特質をもつがゆえに、これだけでは、内部的淘汰の機構を動かす要因となることができない。なぜなら、ポパーの内部的淘汰の理論は、有機体の種の進化の機構についての理論であり、この機構を構成する要因としての選好は、少なくとも、ある程度の幅をもつ時間と、ある程度の広がりをもつ空間において存在することが想定されているのであるが、特定の個体として

の有機体によって特定の時間および空間において一回毎に形成され消滅する選好は、これだけでは、内部的淘汰の要因のこの要件を満たすことができないからである。

内部的淘汰の過程を引き起こしうるためには、狭義の価値としての選好は、それが、特定の個体としての有機体によって、何らかの特定の時間および空間において、その都度形成され消滅する観念でありながら、しかも、この時間および空間において一回だけ現れ、もはや現れることのないものとしてではなく、少なくとも、何らかの時間的および空間的範囲において、たとえ同一とはいわないまでも、少なくともほぼ同じ内容をもって、繰り返して現れるものでなければならない。選好は、このような存在である場合に、はじめて、あたかも、ある程度の時間的および空間的範囲をもつ存在であるかのように現れるのであり、内部的淘汰の過程を引き起こす要因となることができるようにみえるであろう。

このような選好は、特定の個別的主体が、特定の個別的対象について対象観念と狭義の価値とを形成するとき、当の個別的対象のそれを超える何らかの時間的および空間的広がりをもついわば対象種の観念ないし種としての対象観念を形成し、これによってその個別的対象を把握するとともに、この種としての対象観念に対して、これに対応する一般性をもつ観念としての狭義の価値を形成し付与して、その個別的対象を評価することによって、成立することができる。

特定の時間および空間において何らかの個別的対象に出逢うとき、われわれは、この個別的対象を、たんに個別的対象そのものとして認識するわけではない。われわれは、通常は、むしろ、その個別的対象を何らかの対象種の一つとして認識する。このとき、われわれは、この個別的対象を含むものとしての対象種の観念ないし対象概念を形成し、この対象概念によって、当の個別的対象を認識しているのである。そして、われわれは、また、この対象概念を、他の個別的対象にも適用し、これを認識しようとする。

われわれは、このような対象概念に対して、これに対応する一般性をもつ狭義の価値を形成し付与する。ここに形成され付与される狭義の価値は、何らかの対象概念に対して、したがって、これによって把握されうる複数の対象一般に対して与えられる観念であり、この意味において、それは、やはり、一つの概念である。この狭義の価値を、わたくしは、対象概念に対応する狭義の価値概念とよぶことにしたい。

われわれは、通常、何らかの個別的対象を対象概念によって把握するとともに、この対象概念に対応する狭義の価値概念を形成することによって、当の個別的対象を評価する。そして、われわれは、当の個別的対象以外の複数の個別的対象についても、この対象概念とこれに対応する狭義の価値概念とを当てはめることによって、それらを把握し評価しようとする。対象概念とこれに対応する狭義の価値概念とは、このように、さまざまな時間および空間における何らかの複数の個別的対象に一般的に適用されるのであり、対象観念と狭義の価値とは、それぞれ、このような対象概念と狭義の価値概念をそのうちに含むことによって、先に述べた個別性をもつにもかかわらず、ほぼ同じ内容をもって、くり返して現れるのである⁴⁾

3. 価値形成機構としての選好 — 選好構造

3-1 遺伝子的選好構造と行動的選好構造

以上において、わたくしは、対象観念のうちに対象概念を理解し、狭義の価値のうちに対象概念に対応する狭義の価値概念を理解するとともに、ひとが、このような対象概念と狭義の価値概念とを何らかの対象に当てはめることによって、この対象を把握し、これを評価することを述べた。その場合、何らかの対象概念とこの対象概念に対応する狭義の価値概念とは、ひとが特定範囲の複数の個別的対象をそれぞれ把握し評価しようとするとき、その都度、繰り返して現れるのであり、このことによって、それらは、それら自体が、あたかも持続的存在であるかのようにみえることになる。

だが、このように考える場合にも、わたくしには、なお、これだけでは、ポパーのいう選好が説明されたことになるとは、とうてい思えない。この理由の一つは、ポパーの提唱する理論が、有機体の内部における淘汰の機構の理論であり、しかも、この理論において中心的位置を与えられている要因としての選好が、有機体によって形成される狭義の価値というより、むしろ、このような狭義の価値を形成する有機体そのものの機構、有機体内部の価値形成機構、であるように思われるところにある。

われわれは、狭義の価値と価値形成機構とを、けっして混同してはならない。前者は、後者によって形成される成果ないし後者の機能の効果であり、後者が存在し機能することによって、はじめて成立する。

このように考えてポパーの論述を見直すとき、われわれは、かれが選好という言葉によって意味するもののうちに、狭義の価値だけでなく、これとは別のもう一つのものを見出すことができる。それは、かれが、選好を選好構造 (Präferenzstruktur) といいかえるとき、暗黙のうちに意味しているものである。ここに選好構造といいかえられる選好は、有機体によってその時々形成される狭義の価値ではなく、有機体のうちにあつて、このような狭義の価値をその時々形成する価値形成機構に他ならない。

われわれがすでに明らかにしたように、ポパーは、かれのいう選好構造のうちに、二つのものを理解する⁵⁾。その第一は、かれが本能的選好 (instinktive Präferenz) または遺伝子的 P -構造 (genetische P -Struktur), すなわち遺伝子的選好構造、とよぶものである。これを、かれは、また、簡単に、 P -遺伝子 (P -Gene) つまり選好遺伝子、ともいいかえている。この P -遺伝子は、 G -遺伝子 (G -Gene), つまり技能遺伝子ないし遺伝子的技能構造とともに、 V -遺伝子 (V -Gene), つまり行動遺伝子、ないし遺伝子的 V -構造 (genetische V -Struktur), つまり遺伝子的行動構造、を構成する。それは独特の構造をもちつつ、やはり独特の構造をもつ他の遺伝子とともに、有機体のうちに組み込まれている。このような遺伝子的選好構造は、明らかに、狭義の価値としての選好ではない。

それは、この意味での選好を生み出す機構、正確にはこの機構の一部、である。

ポパーのいう選好構造を構成する第二のものは、かれが行動的選好構造 (verhaltensmäßige Präferenzstruktur) とよぶものである。これは、かれによって、特定の遺伝子的選好構造のもとで、ある幅をもって自由に展開され形成される行動、として説明されている。そして、この選好構造の変化は、遺伝子的変化ないし遺伝子的変異から区別されて、「純粹行動的」変化 (»rein verhältnismäßige« Veränderungen) ないし「純粹行動的」変異 (»rein verhältnismäßige« Veränderungen) とよばれたのである。

行動的選好構造は、上記のように、それが一つの「行動」として説明され、また、その変化がとくに「純粹行動的」変化とよばれていることから、遺伝子的選好構造とは異なり、行動としての選好ないし狭義の価値を生み出す機構ではなく、まさにこの機構によって生み出される行動としての選好ないし狭義の価値そのもの、として理解されなければならないかにみえる。

だが、われわれは、このような考え方を採ることができない。われわれは、行動的選好構造が、遺伝子的選好構造と同じく、狭義の価値としての選好ないし行動としての選好そのものではなく、このような選好を生み出す機構の一つとして理解されるべきものである、と考えなければならない。それは、遺伝子的選好構造とともに、主体としての有機体のうちに組み込まれており、この主体が、例えば特定の対象について何らかの対象観念を形成するとき、これに結びつく何らかの狭義の価値を生み出す、有機体内部に存在する仕組みの一つなのである。

特定の遺伝子的選好構造のもとで、行動的選好構造は、行動としての選好すなわち狭義の価値としての選好を生み出す。この選好は、通常、何らかの対象概念に対応して形成される狭義の価値概念を主内容とするものであり、対象概念とともに反復して形成され、対象概念によって把握される複数の個別的対象に対して適用される。狭義の価値の主内容をなす狭義の価値概念のこのような反復的形成は、遺伝子的選好構造によって許容される幅のうちで、行動的選好

構造が、何らかの対象概念に対応する狭義の価値概念を繰り返して生み出す機能、この意味で何らかの特定の型に従う機能をもつことによって可能となる。われわれは、価値形成機構のこのような機能を価値形成機構の機能型とよぶことにしよう。

この場合、われわれは、行動的選好構造のみならず、遺伝子的選考構造も、また、何らかの対象概念に対応する狭義の価値概念を繰り返して生み出す機能としての機能型をもつことに注意しておくべきであろう。価値形成機構の機能型には、行動的選好構造の機能型と遺伝子的選好構造の機能型とが見出されるのである。この二つの機能型は、ただ、前者が後天的であるのに対し、後者が先天的である点で相違する。それらは、いずれも、行動様式 (Verhaltensweisen) の一つである。

個体としての有機体は、その遺伝子的選好構造において複数の機能型をもつことがある。これら機能型のあるものは、この個体の一生の特定段階に現れて特定期間だけ持続し、他のあるものは、この個体の誕生とともにその一生を通じて持続するであろう。特定の個体の遺伝子的選好構造については、その機能型の種類、その発現の時期と存続期間は、この個体の遺伝子によって予め概ね規定されている。遺伝子的選好構造は、このような機能型を主要素とする一つの構造をなす、と考えられる。

これに対して、行動的選好構造については、特定の個体が有しうる機能型の種類、その発現の時期および存続期間は、予め規定されているわけではない。行動的選好構造の機能型は、たしかに、遺伝子によって許容される範囲内で生じ、ときには遺伝子との関連において生じるようにさえみえるのであるが、しかし、その生成と存続とを規定する主要因は、むしろ、当の個体が生まれてから死ぬまでの間に遭遇する諸状況である。そして、特定の個体がどのような状況に出逢うかは、しばしば著しく偶然性に左右されるがゆえに、この個体はその行動的選好構造において有しうる機能型の種類、時期および存続期間も、また、高度の偶然性に左右される。

だが、それにしても、行動的選好構造の機能型は、個体としての有機体の生涯のうちの何らかの期間、そのいくつかはかなり長い期間、にわたって存続する。そして、このような持続性をもつ機能型のいくつかが連続的に形成される時、個体としての有機体は、その行動的選好構造のうちに、複数の機能型を同時にもつことになる。これら機能型は、遺伝子的選好構造が許容する範囲で、ときには遺伝子的選好構造との関連において形成されるがゆえに、それらが偶然的な状況によって左右されるとはいえ、まったくでたらめに形成されるわけではないであろう。その形成には、おそらく、大まかではあるが、何らかの様式ともいべきものがあるであろう。このように考えるとき、行動的選好構造の複数の機能型が相互にある関連性を持ち、ときには体系性をさえもつようにみえることは、不思議ではない。換言すれば、それらは、個体としての有機体のうちで、やはり、一つの構造をもつようにみえる。このことによって、価値形成機構の一部としての行動的選好構造は、一つの構造をもつ機構として、つまり選好構造として、理解されうる側面をもつのである。

このように考えるとき、遺伝子的選好構造のみならず、行動的選好構造によって生み出される、さまざまな狭義の価値としての選好自体が、何らかの構造を有するようみえるのも、また、不思議ではないであろう。それら選好は、さまざまな持続性を持ちつつ相互に関連し、ときには体系を示すようにさえみえるのであるが、このことは、二つの選好構造の諸機能が、それぞれ何らかの型に従って狭義の価値を生み出し、しかも、それらが相互に構造化されていることの反映である。

3-2 対象観念形成機構と価値形成機構

わたくしは、これまで、ポパーのいう選好について、狭義の価値と価値形成機構とを区別し、後者について、先天的価値形成機構としての遺伝子的選好構造と後天的価値形成機構としての行動的選好構造とを見出してきた。このようなわたくしの論述は、価値あるものごとを価値とよぶ、しばしば行われている

考え方とは、異なる考え方にもとづいている。わたくしは、価値あるものごとの意味における価値を広義の価値とよび、これが、何らかの対象について主体が形成する思惟像としての対象観念と、この対象観念について主体が形成する望ましきまたは望ましくなさの観念としての狭義の価値とから構成される一つの観念である、と考える。そして、わたくしは、ポパーのいう選好は、このような狭義の価値として理解されるとき、より明確になる、と考える。

もっとも、このように述べるからといって、わたくしは、ポパーが、選好という言葉で、対象観念から区別される狭義の価値として、つねに明確に意識しつつ、用いていることを意味しようとするわけではない。選好という言葉の意味は、かれにおいては、しばしば曖昧である。例えば、かれが、何らかの有機体における選好の変化について述べるとき、このことによってかれが意味しているものは、一つには、当の有機体が新しく何らかのものごとを好むようになることであり、ここでは、選好は、何らかのものごととこれを好むこと、したがって対象観念と狭義の価値、との二つを含むものとして、用いられている。ここでは、選好は、むしろ、広義の価値を意味するものとして用いられているわけである。

だが、それにもかかわらず、ポパーのいう選好は、ひとが、これを、とりわけ狭義の価値として理解し、かれの論述を整理するとき、内部淘汰の理論におけるその位置を一層明確なものとする。それゆえにこそ、わたくしは、ポパーのいう選好を狭義の価値として理解し、このことによって、かれの論述の曖昧性を払拭しようとするのである。

このような考えから、わたくしは、これまで、ポパーのいう選好を、まず、狭義の価値として理解し、これを対象観念から慎重に区別して扱ってきた。そして、このような思考の一環として、わたくしは、つぎに、ポパーのいう選好のもう一つの意味として、狭義の価値を形成する機構としての価値形成機構を理解し、そのうちに、遺伝子的選考構造のみならず、行動的選考構造を見出したのである。

だが、ポパーのいう選好が意味するものの一つとして、狭義の価値から区別される価値形成機構を理解するとき、わたくしは、ここで、また、対象観念を形成する機構についても述べておかなければならない。わたくしの当面の主たる関心は、対象観念に関わる問題そのものにあるわけではなく、狭義の価値に関わる問題にあるのであるが、しかし、狭義の価値は、通常は、何らかの対象観念に対して形成され付与されるのであり、狭義の価値が形成されるためには対象観念の形成が前提されなければならないがゆえに、狭義の価値を形成する機構を問題とするとき、わたくしは、対象観念を形成する機構についても、触れざるをえないのである。

わたくしは、狭義の価値だけでなく、対象観念も、また、これを形成する何らかの機構によって形成される、と考える。対象観念を形成するこの機構を、わたくしは、対象観念形成機構とよぶことにしよう。ここに対象観念とは、有機体は何らかの対象を把握する際に形成する心像としての対象像である。それは、何らかの対象について、意識的に形成される認識像のみならず、無意識のうちに形成される複雑かつ曖昧な像、さらには、意識的または無意識的に単純な刺激として感知される心像までを含んでいる。対象観念形成機構は、このような対象観念を形成する機構であり、これは、おそらく原始的有機体にみられる専ら無意識的な単なる感知機能のみをもつ単純な機構から、高等動物にみられる高度に意識的な認識機能をもつ複雑な機構にいたるまでの諸形態を、そのうちに含んでいる。われわれは、これを、広義における認識機構とよぶこともできるであろう。

対象観念形成機構の特質の一つは、対象を何らかの定型化された心像として把握する機能をもつことである。この機能は、おそらく原始的有機体にみられる、何らかの刺激を何らかの単純な定型的信号として把握する機能から、高等動物にみられる、何らかの対象をかなり複雑な定型的対象像として把握する機能にいたるまでのものを含む。対象観念形成機構は、このような定型化された心像を、何らかの範囲の複数の対象について繰り返して形成する。そして、こ

のような定型化された心像を、われわれは、対象概念とよぶのである。このようによぶとき、われわれは、対象観念形成機構の概念形成機能について語ることができる。

われわれは、さきに、価値形成機構としての遺伝子的選好構造と行動的選好構造とが、特定の対象概念に対応する特定の狭義の価値概念を生み出す機能をもつことを述べ、これを価値形成機構の機能型とよんだのであるが、この機能型は、対象観念形成機構の概念形成機能を前提としている。価値形成機構は、対象観念形成機構が形成する何らかの対象概念に対して、何らかの狭義の価値概念を形成する。そして、後述するように、価値形成機構の一つとしての行動的選好構造において、狭義の価値概念が何らかの対象概念に対して新しく形成されるとき、行動的選好構造は、新しい機能型をもち、内部的淘汰の過程を引き起こすこととなりうるのである。

対象観念形成機構と価値形成機構とは、もともとは、何らかの外的な刺激に対する単純な反応機構として、未分化であったのかもしれない。そして、また、それらは、今日もなお、ある種の有機体については、未分化であるようにみえる。だが、それらは、少なくとも人間については、それぞれ、一応別個の存在として考えられうるほどに分化していると思われる。われわれは、すでに、人間について、対象観念と狭義の価値とが独自に存在しうることを述べた⁹⁾のであるが、このことは、対象観念の形成と狭義の価値の形成とが、それぞれ独自の機能であり、この二つの機能を担当する機構が、別個のものとして考えられうることを示しているようにみえるのである。

ただ、この場合、われわれは、また、他方で、人間の場合にも、対象観念と狭義の価値とが、通常は結び付いて現れることを忘れてはならない。このことは、人間の対象観念形成機構と価値形成機構とが密接に関連しつつ機能するものであることを、われわれに推測させる。価値形成機構の機能型は、まさに、対象観念形成機構と価値形成機構との機能的関連を示すものに他ならない。

4. 価値形成機構と内部的淘汰

4-1 個体における行動的選好構造の変化

われわれは、以上において、対象観念と狭義の価値のうちに、それぞれ、対象概念と狭義の価値概念とを理解し、これらの概念が、個体としての有機体によって繰り返して形成されることを述べた。そして、われわれは、これら二つの概念のそれぞれを含む対象観念と狭義の価値とを生み出す有機体内部の機構として、一方において対象観念形成機構を、他方において価値形成機構を理解した。対象概念は、対象観念形成機構の一つの機能によって生み出され、また、狭義の価値概念は、価値形成機構の一つの機能によって生み出されるわけである。さらに、われわれは、価値形成機構のうちに、遺伝子的選好構造と行動的選好構造とを区別し、これら価値形成機構が、対象観念機構と関連しつつ、対象概念に対応する狭義の価値概念を繰り返して生み出すことを述べた。そして、特定の対象概念に対して特定の狭義の価値概念を繰り返して形成する価値形成機構のこの機能を、機能型とよんだのである。このような考察を前提とするとき、われわれは、ポパーによって提示された内部的淘汰の理論を、どのように修正することができるであろうか。

われわれは、まず、内部的淘汰の過程の発端が、有機体における選好の変化にある、というポパーの考え方から出発したい。ここにいう有機体における選好の変化とは、第一に、有機体一般における選好の変化ではなく、特定の個体としての有機体における選好の変化を意味する、と考えられなければならない。ある有機体種に属する一個体が、その選好を変化させることが、それである。それは、第二に、このような個体が、新しく、何らかのものごとを好むまたは嫌うようになることを意味する、と考えられなければならない。それは、正確に言えば、特定の個体としての有機体が新しく何らかの対象観念に対して何らかの狭義の価値を形成することを意味するのである。

この場合、対象観念それ自体は、この個体としての有機体によって、新しく

形成されるものでありうる。だが、それは、新しく形成されなければならないわけではない。それは、この有機体がすでに形成しているものでもよい。新しく形成される対象観念であれ、すでに形成されている対象観念であれ、ここでは、特定の個体としての有機体によって、何らかの対象観念に対して、新しく何らかの狭義の価値が形成され付与されることが、重要なのである。

特定の個体としての有機体によるこのような選好の変化は、この個体が有する特定の遺伝子的選好構造によって許容される範囲内で生じる。価値形成機構の一部としての遺伝子的選好構造は、個体としての有機体が、新たに何らかの対象観念に対して何らかの狭義の価値を形成し付与することを可能にするのであるが、しかし、この場合、遺伝子的選好構造は、いかなる対象観念に対しても、何らかの狭義の価値を形成し付与することを許容するわけでもなければ、何らかの対象観念に対して、いかなる狭義の価値をも形成し付与することを許容するわけでもない。それは、何らかの幅ないし範囲のなかでのみ、個体としての有機体が、新たに何らかの対象観念に対して何らかの狭義の価値を形成し付与することを、可能とするのである。

このように特定の個体としての有機体の選好の変化をある範囲内で可能とする価値形成機構は、もちろん、遺伝子的選好構造だけではない。遺伝子的選好構造とともに価値形成機構を構成する行動的選好構造も、また、そのように作用する。行動的選好構造は、これがすでに形成されているとき、特定の遺伝子的選好構造が許容する幅のなかで、狭義の価値としての選好の変化を可能とするのであるが、しかし、そのあまりにも大きな変化は、これを自ら抑制するよう働くのである。

特定の個体としての有機体が、何らかの対象観念に対して、新しく、何らかの狭義の価値を形成し付与するとき、この対象観念と狭義の価値とは、それ自体、いわば一回的事象である。それらは、いずれも、何らかの時点において形成され消滅する。だが、それにもかかわらず、このような対象観念と狭義の価値は、しばしば、何らかの範囲の複数の対象について繰り返して形成されるの

であり、それらは、あたかも持続的存在であるかのようにみえることがある。この場合の対象観念と狭義の価値は、それぞれ、たしかに、必ずしもまったく同一の内容をもつものではないかもしれない。しかし、それらは、少なくともほぼ同じ内容をもつものではある。

このように、何らかの範囲の複数の対象について特定の有機体のうちに同様の対象観念と狭義の価値とが繰り返し形成されることは、すでに述べたように、対象観念と狭義の価値とが、それぞれ対象概念と狭義の価値概念を含むものとして形成され、しかも、これら二つの概念が、繰り返して形成されることによって、可能となる。そして、対象概念と狭義の価値概念とを繰り返して形成する機能をもつことが、有機体の対象観念形成機構と価値形成機構の一つの特質なのである。

この二つの機構がこのような特質をもつことによって、特定の個体としての有機体は、ある範囲の個別的諸対象を特定の対象概念によって同種のものとして把握し、この対象概念に対して、特定の狭義の価値概念を形成し付与することになる。ここでは、特定の個別的有機体の選好構造は、特定の対象概念に対応する特定の狭義の価値概念の形成という特定の型ないし様式に従う機能すなわち機能型を示すのであり、このことによって、選好構造によって形成される選考自体が、特定の型ないし様式をもつようにみえるのである。

さて、特定の個別的有機体が、新たに、何らかの対象概念に対応する狭義の価値概念を繰り返して形成するようになることは、この個体の行動的選好構造に新しい機能型が生じることによって可能となる。行動的選好構造を、機能型を主たる要素とする構成体として考えるとき、われわれは、このような新しい機能型の生成を、行動的選好構造の変化として理解することができる。

特定の個体としての有機体の行動的選好構造のこの変化は、この個体の行動的選好構造が、これまでの機能型に代えて、新しい機能型をもつという形をとることがある。このときには、当の個体の行動的選好構造は、これまでの対象概念に代えて、これと異なる対象概念に対して何らかの狭義の価値概念として

の選好を形成するだけであり、ここには、行動的選好構造の機能型の多様化はみられない。

だが、特定の個体としての有機体の行動的選好構造の変化は、他方で、この個体の行動的選好構造の機能型を増加させる形をとることがある。このときには、この個体の行動的選好構造を構成する機能型は多様化し、この多様性に応じて、さまざまな対象概念に対してさまざまな狭義の価値概念としての選好が形成されうることになる。ここに、われわれは、特定の個体としての有機体についてではあるが、ポパーのいう生命形態の高度化をみることができる。

もっとも、このような高度化の進展は、われわれがここで問題としている特定の個体としての有機体についてみる限り、極めて限られている、といわれなければならない。その理由は、とりわけ、特定の個体としての有機体については、これが、その行動的選好構造において新しい型にしたがう機能を獲得する頻度が限られていることにある。だが、それにしても、われわれは、特定の個体としての有機体におけるこのような生命形態の高度化が、この有機体の種における生命形態の高度化の基礎であることを、注意しておくべきであろう。

以上において、われわれは、個体としての有機体の価値形成機構が、そのうちの行動的選好構造において、新しく、何らかの型にしたがう機能ないし機能型をもつようになることを知ることができたであろう。ここにみられるのは、行動的選好構造という価値形成機構自体の変化である。ただ、この変化は、個体としての有機体に限られている。

4-2 行動的選好構造の伝播

わたくしは、特定の個体としての有機体のうちでの行動的選好構造の変化について述べてきた。だが、行動的選好構造の変化は、これが、たんに特定の個体としての有機体のうちに留まる限り、内部的淘汰の過程を引き起こすことができない。なぜなら、内部的淘汰の過程とは、特定の個体としての有機体を超える種としての有機体の進化の過程なのであり、特定の個体としての

有機体のみが生じる行動的選好構造の変化は、この個体の死滅によって消え失せるがゆえに、それだけでは、内部的淘汰の過程を引き起こすことができないからである。

特定の個体としての有機体における行動的選好構造の変化が、内部的淘汰の過程を引き起こし、種の進化をもたらすためには、当の個体の行動的選好構造の新しい機能型と同様の機能型が、少なくとも、複数の個体としての有機体のうちに、ある期間内において、ほぼ同時に存在しなければならない。だが、このような事態は、どのようにして成立しうるのであろうか。

われわれは、このような事態が成立する場合の一つとして、まず、複数の個体としての有機体が、それぞれ独自に、しかも、ほぼ同時に、同様の行動的選好構造の機能型を新たに形成すること、を考えることができるであろう。このことは、いわば同様の偶然が複数の個体において一斉に起こることを前提としているかにみえるのであり、ひとは、このような場合が存在する可能性を、一見して否定したくなるかもしれない。

だが、われわれは、これを簡単に否定し去ってはならない。なぜなら、個体としての有機体が、新たにどのような行動的選好構造の変化を遂げるか、すなわち、新たにどのような対象概念にどのような狭義の価値概念を形成し付与する機能をもつようになるかは、個体としての有機体のそれぞれに、いわば無限の自由をもって委ねられているわけではないからである。

第一に、何らかの有機体種の諸々の個体は、それらがすでに有している、ほぼ同一の遺伝子的選好構造によって許容される幅の中でのみ、(そして、後述するように、諸々の個体が、ほぼ同一の行動的選好構造を有するようになった場合には、それらが有している、ほぼ同一の行動的選好構造によって許容される幅の中でのみ、)何らかの対象概念に対して、新しく何らかの狭義の価値概念を繰り返して形成し付与する機能をもつことができるにすぎない。第二に、このような狭義の価値概念の形成と付与とは、諸々の個体にほぼ共通に作用し、これらを制約する外部的条件のなかで行われる。これらのことが、諸々の個体の

行動的選好構造の変化の幅を（時には著しく）狭めることになり、このことによって、複数の個体が、それぞれ、ほぼ同時に、新たに、同様の対象概念に対して同様の狭義の価値概念を形成し付与するようになることは、けっして起こりえないことではないのである。

しかし、複数の個体としての有機体が、それぞれ独自に、ほぼ同時に、同様の行動的選好構造の変化を起こすことを認める場合にも、複数の個体のうちに形成された行動的選好構造の新しい機能型は、これらがいずれも、それぞれの個体のうちのみ留められる限り、やはり、これら個体の死滅とともに消滅することになり、内部的淘汰の過程を引き起こすことはない、と考えられなければならないであろう。

個体としての有機体のうちに形成された行動的選好構造の新しい機能型は、これが内部的淘汰の過程を引き起こすためには、他の個体に影響し、この個体の選好構造の変化をもたらさなければならない。それでは、このような影響の過程は、どのようにして生じるのであろうか。

このような過程として、われわれが直ちに想起することができるのは、行動的選好構造のうちに新しい機能型をもつこととなった特定の個体の遺伝子的選好構造が、その子孫へ遺伝すること、これであらう。行動的選好構造の変化は、その遺伝子的選好構造においてこの変化によりよく備えている個体において、より容易にかつよりよく生じうる、と考えられる。このような遺伝子的選好構造は、これをもつ個体からその子孫へと伝えられる。そして、行動的選好構造の変化が何らかの理由で、これを引き起こす個体にとって有利であれば、その遺伝子的選好構造において、この行動的選好構造の変化によりよく備えている個体、そして、また、この個体の遺伝子的選好構造を受け継ぎ、同様の行動的選好構造の変化をより容易かつよりよく生じうる子孫は、よりよく生き延びうることになるであらう。このように考えてゆくと、われわれは、何らかの有機体の種が、特定種の行動的選好構造、そして特定種の遺伝子的選好構造をもつ諸々の個体によって占められることとなる可能性を理解することができるの

である。

さて、以上の論述において、われわれは、何らかの個体としての有機体およびその子孫が、行動的選好構造の何らかの新しい種類の機能型を、それぞれ独自に形成し保持することを、仮定している。このように仮定することは、これら個体の遺伝子的選好構造が当の機能型の形成によりよく備えているだけでなく、さらに、この機能型の形成を促す同じ外部的条件が、これら個体に対して存在していることを考慮するならば、必ずしも不自然とはいえないであろう。

だが、いくつかの高度に発達した有機体種をみると、われわれは、そこに、特定の個体の子孫のみならず、その個体と何らかの関連をもつ他の個体が、その個体によって形成された行動的選好構造の新しい機能型と同様の機能型を、それぞれのうちに形成するための、特殊な手段が存在することを看過することができない。この手段とは、行動的選好構造の一部としての特定の機能型を、ある個体から他の個体へと伝播する、広義における教育である。

これは、特定の個体によって形成されることとなった行動的選好構造の新しい機能型の、他の個体の選好構造への、一つの独特の影響過程を形成する。この過程は、行動的選好構造と遺伝子的選好構造とを結ぶ影響過程ではなく、行動的選好構造と行動的選好構造とを結ぶ影響過程である。行動的選好構造は、たしかに、遺伝子的選好構造に影響しうるのであるが、しかし、われわれがここで問題としている影響は、行動的選好構造から遺伝子的選好構造へのいわば直接的影響ではなく、ある個体の行動的選好構造から他の個体の行動的選好構造への影響を介しての間接的影響である。この意味では、この影響過程は、行動的選好構造の間接的影響過程、いわば一つの迂回路、をなすといえることができる。だが、それは、迂回路であるがゆえに、有機体の種の進化に対するその意味は、かえって重大であるようにみえる。なぜなら、この過程は、遺伝子的選好構造に影響する行動的選好構造を多くの個体において予め変化させうるのであり、このことによって、それは、行動的選好構造から遺伝子的選好構造への直接的影響過程のみがなしうるよりも、はるかに速く、有機体種の遺伝子的

選好構造を変化させうるからである。

行動的選好構造のこのような間接的影響過程は、影響を受ける相手としての個体の相違に応じて、二つに区別されうる。その一つは、特定の個別的有機体から、その子供への過程であり、もう一つの、おそらくより重要な過程は、特定の個別的有機体から、その仲間への過程である。前者が、子供を養育する機能をもつこととなった有機体種について、後者が、親と子との関係を越え、仲間との共同生活を営む機能をもつこととなった有機体種について、見受けられるものであることは、いうまでもない。この二つの機能は、一つの有機体種において同時に存在しうるのであり、この場合には、行動的選好構造の間接的影響過程は、複雑な構造をもつことになりうる。

行動的選好構造の間接的影響過程を形成する教育は、特定の個別的有機体が、あることがらを、他の個別的有機体に教えようとする意思をもつことによって、はじめて成立するものではない。それは、また、個々の有機体のうちに、他の個別的有機体の行動を見習おうとする意思が存在することによって、はじめて成立するものでもない。それは、ただ、個々の有機体のうちに、他の個別的有機体の行動を見習う能力すなわち模倣能力が存在し、これが無意識のうちに発揮されることによって、すでに成立する。

もっとも、このようにいうことによって、わたくしは、教育における意識の役割を軽視しようとしているわけではない。わたくしは、わたくしがとりわけ興味をもっており、また直接の研究対象としている人間の場合、教育が、高度に意識化されていることによって、その意図された効果のみならず、意図されていなかった効果をも含めて、人間の進化の機構に重大な影響を与えていることを、むしろ、強調しておかなければならない。

4-3 価値形成機構と内部的淘汰

ある有機体種が行動的選好構造の伝播手段としての教育をもつとき、この種に属する特定の個別的有機体によって形成された行動的選好構造の新しい機能

型は、教育によって、同じ種の他の複数の個体に広がることもある。この機能型は、この形成によりよく備えている遺伝子的選好構造をもつ個体において、より容易に、かつよりよく、形成されるであろう。そして、この機能型が、何らかの意味で、これをもつ個体にとって有利であるとき、この機能型をより容易にかつよりよく形成する個体、概していえば、遺伝子的選好構造においてこの機能型の形成によりよく備えている個体が、有機体種のうちで増大していくことになるであろう。

このようにして、行動的選好構造の変化は、一つの淘汰圧となって、何らかの有機体種の遺伝子的選好構造を特定方向に変化させうることとなる。そして、この遺伝子的選好構造の変化は、ポパーが提示していた $P \rightarrow G \rightarrow A$ という内部的淘汰の基本式にしたがうとき、技能構造を変化させ、さらに解剖学的構造を変化させる、と考えることができるであろう。すなわち、行動的選好構造の何らかの変化によってもたらされる遺伝子的選好構造の変化は、この変化した選好構造に対応する技能において優れている個体を有利にし、このことによって、この個体が属する集団における技能構造の変化をもたらし、つぎに、この技能構造の変化は、これに対応する解剖学的構造を多少とも備えている個体を有利にし、このことによって、この個体が属する集団における解剖学的構造の変化をもたらし、と。

この場合、われわれは、ポパーの内部的淘汰の式を構成する技能構造についても、また解剖学的構造についても、遺伝子的構造と非遺伝子的構造とを区別することができるかもしれない。

まず、技能構造について、われわれは、遺伝子的技能構造のみならず、非遺伝子的技能構造を考えることができるであろう。有機体の技能は、遺伝子によって規定されているだけでなく、訓練によっても規定されるのであり、訓練によって獲得される技能は、特定の個体のうちに一つの構造的な能力として確立される。訓練によって獲得されるこの技能を、われわれは、ポパーが選好構造について述べていた「純粹行動的」という言葉を用いて、純粹行動的 skill 構造または簡

単に行動的・技能構造とよぶことができるであろう。

行動的・技能構造は、行動的・選好構造と同じく、それぞれの個体によって形成されるものであるがゆえに、個体毎に、何らかの独自性をもっている。それが高度に発展させられるとき、われわれは、そこに、個体に固有の熟練を見出すことができるであろう。だが、行動的・技能構造は、このように、それぞれの個体によって独自に形成され、個性をもつだけではない。それは、また、行動的・選好構造の場合と同じく、しばしば、複数の個体において何らかの共通性をもつ。とりわけ、いくつかの有機体種においては、行動的・技能構造は、教育によって、その要素が、ある個体から他の個体へと伝播され、複数の個体において著しい共通性をもつことがある。教育は、行動的・選好構造のみならず、行動的・技能構造についても、その要素を伝播するのである。人間の場合には、教育は行動的・技能構造の特定の要素を伝播することを一つの目的とする制度として形成され、これによって、行動的・技能構造の複数の個体における共通化が意図されさえするのである。

各個体をもつ行動的・技能構造は、複数の個体に共通の要素と各個体に独自の要素とのいわば合成体であり、一つには、このことから、何らかの選好への技能による対応には、複数の個体における類似性ととともに、個体間の差違性がみられることになる。この差違性は、個体間において、同様の選好への技能による対処の巧拙の差をも意味するのであり、この巧拙の差が、各個体を、当の選好の達成において有利または不利にする。

この場合、われわれは、個体間における何らかの同様の選好ないし広義の価値の実現における巧拙の差が、遺伝子的・技能構造の個体差によっても影響を受けることに、注意しておかなければならない。われわれは、一般に、そもそも、何らかの行動的・技能構造自体が、遺伝子的・技能構造においてその形成によりよく備えている個体において、より容易にかつより優れて形成されうる、と考えることができる。

たしかに、遺伝子的・技能構造において、行動的・技能構造の形成への備えにお

いて劣っている個体も、異常な努力によって、優れた行動的技能構造を形成することがあるのであるが、しかし、このような事態は、一般化できるものではないであろう。われわれは、むしろ、一般的には、遺伝子的技能構造において、上述の何らかの広義の価値の実現によりよく備えている個体が、この広義の価値の実現において有利であろう、と考えざるをえない。このように考えるとき、行動的技能構造よりも、むしろ、遺伝子的技能構造が、何らかの広義の価値の実現において規定的意味をもち、内部的淘汰の基本式 $P \rightarrow G \rightarrow A$ における重要な要因であることが、首肯されうるのである。

解剖学的構造についても、われわれは、遺伝子的構造と非遺伝子的構造とを考えることができる。解剖学的構造については、非遺伝子的構造は、たしかに、さほど顕著なものではないであろう。しかし、われわれは、有機体の解剖学的構造が、これが使用され続けることによって、たとえわずかではあれ、変化することを知っている。この身近な例として、われわれは、人間の職業的訓練による身体の形状の変化をあげることができるであろう。このような後天的に形成される解剖学的構造が、非遺伝子的解剖学的構造である。この非遺伝子的解剖学的構造が、行動的技能構造の形成につれて、これに対応して形成されること、そして、それが、教育による行動的技能構造の要素の伝播に対応して、複数の個体についても形成されうることは、われわれが容易に推測できることである。

有機体は、技能構造の変化に、非遺伝子的解剖学的構造によって対応する。しかし、ここでも、というより、非遺伝子的解剖学的構造がさほど顕著ではないことを考えるならば、ここでは、とくに、解剖学的構造において技能構造の変化に遺伝的に備えている個体が有利であることは、いうまでもない。そこで、解剖学的構造については、われわれは、非遺伝子的構造よりも、遺伝子的構造の方が、種の進化において重要である、といわなければならない。

以上において、われわれは、ポパーの内部的淘汰の基本式における各要素 P , G , A について、遺伝子的構造と非遺伝子的構造とを区別し、それぞれが内部

的淘汰の過程においてもつ役割を考察した。この考察から明らかなことは、ポパーの内部的淘汰の基本式が、かれの説明していたものより、少しく複雑になることであろう。このことは、とりわけ、 P について、われわれがいえることである。われわれは、有機体のうちでも、とくに人間に興味をもつものであるから、ポパーの内部的淘汰の基本式を、人間を念頭において書き換えてみよう。

いま、特定の個体における行動的選好構造の変化または行動的選好構造の新しい機能型を $\dot{P}u$ 、教育によるこの機能型の伝播を $E \cdot \dot{P}u$ 、複数の個体に広まった行動的選好構造の変化または行動的選好構造の新しい機能型を $\tilde{P}u$ 、この新しい機能型に対応する、複数の個体における遺伝子的選好構造の変化を $\tilde{P}g$ とすれば、

$$\dot{P}u \cdots \cdots E \cdot \dot{P}u \cdots \cdots \tilde{P}u \longrightarrow \tilde{P}g$$

この式の $\dot{P}u \cdots \cdots E \cdot \dot{P}u \cdots \cdots$ の部分は、教育によって、複数の個体に行動的選好構造の新しい機能型が生じるまでの過程を表している。特定の個体に生じた行動的選好構造の変化 $\dot{P}u$ は、教育による伝播 $E \cdot \dot{P}u$ を経て、何らかの範囲の複数の個体における行動的選好構造の変化 $\tilde{P}u$ をもたらし、ここに種の進化の過程が始まる。この過程は、まず、 $\tilde{P}u \rightarrow \tilde{P}g$ という経路を辿るであろう。

ポパーの基本式 $P \rightarrow G \rightarrow A$ は、何らかの有機体種の内部的淘汰の式であり、したがって、この式における P は、この有機体の複数の個体における選好構造の変化を示していると考えることができる。このように考えるとき、この基本式における P は、われわれが上に示した式の $\tilde{P}u \rightarrow \tilde{P}g$ のみを示すことになる。それだけではない。ポパーは、かれの基本式における P について P -遺伝子を重視し、この二つがあたかも同一であるかのようにさえ述べるのであり、⁷⁾ もしもこの二つが同一であるとすれば、ポパーの基本式は、 $\tilde{P}g$ から始まることになるであろう。

だが、われわれは、このように考える場合にも、われわれがすでに見た $\dot{P}u \cdots \cdots E \cdot \dot{P}u \cdots \cdots$ を軽視してはならない。この過程は、特定の一個体に生じた行動的選好構造の変化が、どのようにして種における進化の過程を引き起こすか、

を示すものだからである。

$\overset{\circ}{P}u \dots \dots E \cdot \overset{\circ}{P}u \dots \dots$ の過程は、これが、行動的選好構造のさまざまな新しい機能型についてつぎつぎに成立し、 $\tilde{P}u$ そして $\tilde{P}g$ を増加させるとき、種としての有機体の選好構造を著しく多様化させることになる。このことから、われわれは、生命形態の高度化が、教育の発生と発展によって著しく進展する、と仮定することができるであろう。

ポパーの基本式のうち、 $\rightarrow G \rightarrow A$ 部分については、以上の考察の関する限り、われわれは、これをとくに書き換えるだけのものを見出すことができない。技能構造についても、解剖学的構造についても、われわれは、非遺伝子的構造を理解することができるのであるが、これらは、いずれも、技能構造と解剖学的構造とにおける遺伝子的構造の働きを、せいぜい、緩和する作用をもつにすぎないからである。われわれは、ここでは、ポパーの基本式の G 、 A を主として遺伝子的構造として理解すれば足りるのである。

このようにして、われわれは、ポパーの内部的淘汰の基本式を、かれのいう選好の部分についてのみ書き換えることができる。

以上におけるわれわれの考察は、内部的淘汰における選好の重要性を強調するかれの思考について、かれのいわゆる選好のうちに、とりわけ、狭義の価値と価値形成機構とを区別し、さらに、後者について、遺伝子的選好構造と行動的選好構造とを区別するとともに、有機体の種の進化におけるこれら価値形成機構の意義を明らかにしたものに他ならない。その場合、有機体種の一つとしての人間へのわれわれの関心から、われわれは、とりわけ、価値形成機構の一つとしての行動的選好構造とこの伝播手段としての教育とが内部的淘汰の過程においてもつ機能に注目したのである。

5. お わ り に

ポパーのいわゆる選好のうちに、われわれは、狭義の価値とこれを生み出す価値形成機構との二つを見出すことができる。ここに狭義の価値とは、何らか

の対象について形成される心像としての対象観念に対して付与される、望ましさまたは望ましくなさの観念であり、この狭義の価値は、有機体の内部的機構の一つとしての価値形成機構によって、生み出される。有機体は、何らかの対象を、そのもう一つの内部的機構としての対象観念形成機構による対象観念の形成によって把握する。そして、それは、対象観念について狭義の価値を形成することにより、対象観念を、そして対象を、評価するのである。

個体としての有機体の対象観念形成機構と価値形成機構とは、何らかの個別的对象について、その都度、対象観念とこれに対する狭義の価値とを形成する。対象観念と狭義の価値とは、特定の個別的有機体によって一回毎に形成され消滅するのであり、この意味で個別性ないし一回性という特質をもつ。だが、個体としての有機体は、その対象観念形成機構と価値形成機構によって、このような対象観念と狭義の価値とを形成する際、特定の個別的对象を超え、これを含む対象種の観念ないし対象概念と、これに対応する一般性をもつ観念としての狭義の価値概念とを形成し、このような二つの概念によって、個別的对象を把握し評価し、しかも、この二つの概念を、何らかの範囲の他の個別的对象についても繰り返して適用することによって、これらを把握し評価しようとする。個体としての有機体がもつ対象観念形成機構と価値形成機構とのこのような概念形成機能によって、対象観念と狭義の価値とは、一回性という特質をもつにもかかわらず、それぞれ、ほぼ同じ内容をもって、繰り返して現れ、あたかも、持続的存在であるかのように見えるのである。

価値形成機構のうちに、われわれは、二つのものを見出すことができる。一つは、遺伝子的選好構造であり、もう一つは、行動的選好構造である。これらの価値形成機構は、ともに、対象観念形成機構によって形成される何らかの対象観念に対して、狭義の価値を生み出しこれを付与するのであるが、その際、われわれが重視すべきことは、これら価値形成機構が、いずれも、対象観念形成機構によって繰り返して生み出される何らかの特定の対象概念に対して、何らかの特定の狭義の価値概念を繰り返して生み出す機能をもつことである。

これを、われわれは、価値形成機構の機能型とよぶ。

特定の個体としての有機体についていえば、遺伝子的選好構造の機能型は、その発生の時期と存続期間が、遺伝子によって、予め概ね規定されている。これに対して、行動的選好構造の機能型は、遺伝子によって、予め規定されているわけではない。それは、遺伝子的選好構造が許容する幅のなかで、そして、一度行動的選好構造が形成されれば、これが許容する幅のなかで、状況の影響を受けつつ、ある程度の自由性をもって、新しく形成されるのである。

内部的淘汰の過程の発端は、特定の個体としての有機体が、何らかの対象観念に対して、何らかの狭義の価値を、新しく形成することにある。このような狭義の価値の形成は、行動的選好構造の新しい機能型として発現しうる。この新しい機能型は、ある有機体種の複数の個体に、ほぼ同時期に生じることがある。なぜなら、ある有機体種の複数の個体は、それらが有しているほぼ同一の遺伝子的選好構造と、ほぼ同一の行動的選好構造によって許容される幅の中でのみ、新しい機能型を形成するのだし、また、この機能型の形成に作用する外部的条件は、複数の個体に、ほぼ共通に働くからである。

しかし、たとえ複数の個体が、それぞれ、ほぼ同時に、同様の行動的選好構造の新しい機能型を形成したとしても、このような機能型は、それぞれの個体が死滅すれば、それとともに消失するのであり、したがって、そのような機能型の成立という事態も、それだけでは、内部的淘汰の過程を引き起こすことにはならない。内部的淘汰の過程を引き起こすためには、行動的選好構造の新しい機能型は、他の個体の選好構造に影響しなければならない。

このような影響としてわれわれが考えることができるものの一つは、行動的選好構造のうち新しい機能型をもつこととなった特定の個体の遺伝子的選好構造の子孫への遺伝である。行動的選好構造の新しい機能型は、遺伝子的選好構造においてその形成によりよく備えている個体において、より容易かつよりよく生じうる、と考えられるのであるが、このような遺伝子的選好構造は、これをもつ個体から、その子孫へと伝えられる。この子孫は、行動的選好構造の

新しい機能型を、より容易かつよりよく形成するであろう。外部的条件が、この形成を助長するよう働くことは、いうまでもない。

影響のもう一つは、行動的選好構造の新しい機能型が、教育によって、ある個体から他の個体へと伝播すること、これである。ここでは、ある個体の行動的選好構造から、(この行動的選好構造に備えていたこの個体の遺伝子的選好構造を介する、)他の個体(すなわち最初の個体の子供)の遺伝子的選好構造への影響過程ではなく、ある個体の行動的選好構造から、他の個体の行動的選好構造への影響過程が問題となる。教育という行動的選好構造の伝播手段の生成と発展によって、ある個体の行動的選好構造は、これが他の個体の遺伝子的選好構造に影響するに先立って、他の個体の行動的選好構造を予め変化させうるのであり、このことによって、行動的選好構造の遺伝子的選好構造への影響は、はるかに速く、多くの個体において生じうることになる。

ある個体の行動的選好構造から他の個体の行動的選好構造へのこの影響過程は、影響を受ける相手としての個体の相違に応じて、特定の個体からその子孫への影響過程と、特定の個体からその仲間への影響過程とに区別される。この二つの過程は、ある種の有機体においては、同時に見出されうる。この場合には、行動的選好構造から行動的選好構造への影響過程は、複雑な様相を呈することになる。

とりわけ人間の場合、この影響過程は意識的に形成されており、ポパーのいう生命形態の「高度化」を進展させる要因となっている。そこで、有機体の一様として人間に格別の関心をもつわれわれは、ポパーの内部的淘汰の基本式を、教育による行動的選好構造の伝播過程を含むものへと、書き換えることを必要とするのである。

この論文において、われわれは、ポパーの内部的淘汰の基本式を、あくまでも、内部的淘汰の範囲内で書き換えるに留めている。だが、とくに人間を念頭において考察を進めるとき、われわれは、内部的淘汰の範囲を超えて問題を展開せざるをえなくなるであろう。なぜなら、人間は、行動的選好構造の伝播手

段として、さらには行動的・技能構造の伝播手段として、教育を一つの社会制度として形成し発展させてきたのであり、この社会制度としての教育によって、その進化に著しい影響を受けることとなっているのであるが、このような教育は、もはや、内部的淘汰の枠内で取り扱いうる有機体内部の要因ではないからである。

社会制度としての教育を問題とするとき、われわれは、それが内部的淘汰の要因である技能構造に、そしてさらに、解剖学的構造に、与える影響をも論じなければならないであろう。このような考察は、ポパーの内部淘汰の基本式とは異なる淘汰の基本式を生み出すこととなるにちがいない。だが、われわれは、これらのことに、この論文で立ち入ることができない。

注

1) Vgl. K. R. Popper, "Ausgangspunkte, Meine intellektuelle Entwicklung", 3. Aufl., Hamburg, 1984.

2) 拙稿「ポパーの進化の理論と価値の問題」『松山大学論集』第4巻第5号, 1992年12月を参照されたい。

3) 例えば, つぎを参照されたい。

拙稿「価値の構造(一)」『松山大学論集』第4巻第3号, 1992年8月。

4) この場合, わたくしは, 人間が, 何らかの対象を対象概念のみによって把握し, それを対象種の一つとしてのみ理解すること, および, その対象をこれに適用される対象概念に対応する狭義の価値概念のみによって評価すること, を主張しようとしているわけではない。

わたくしは, 人間が, 何らかの個別的对象について, その個性を把握し, これに対して独特の評価をすることがあることを承認する。わたくしは, さらに, この個性の認識と独特の評価が, 対象概念と狭義の価値概念とを精緻化しさらには改変する一つの契機であるときえ考える。しかし, それにもかかわらず, わたくしには, 人間が何らかの個別的对象を把握し評価する仕方は基本的には概念的であるように見える。個性的な認識および評価は, おそらくは認識および評価の高度の形態であり, 概念的な認識および評価のあとに発展してきたのだ, と思われる。

5) Vgl. K. R. Popper, a. a. O., SS. 252-253.

つぎをも参照されたい。

拙稿「ポパーの進化の理論と価値の問題」『松山大学論集』第4巻第5号, 1992年12月, 88—92ページ。

6) つぎを参照されたい。

拙稿「価値の実在性」『香川大学経済論叢』第60巻第2号, 1987年, 74—75ページ。

7) Vgl. K. R. Popper, a. a. O., S. 215.

つぎをも参照されたい。

拙稿「ポパーの進化の理論と価値の問題」『松山大学論集』第4巻5号, 1992年12月, 95ページ。